

児童の作文に対する困難感に関する探索的研究

筑波大学大学院(博)心理学研究科 平山祐一郎

筑波大学心理学系 福沢 周亮

The structure of children's difficulties in writing compositions : A pilot study

Yuichiro Hirayama and Shusuke Fukuzawa (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purpose of this study is to explore the structure of children's difficulties in writing compositions. Eighty-nine fifth graders answered a questionnaire that consisted of twenty-seven items on difficulties in writing compositions. Most of the items on the questionnaire were constructed on the basis of the study by Hirayama (1994). A factor analysis revealed five factors : difficulty in planning, expression, evaluation, time and basic skills. This result implied that in order to teach children writing, it is necessary to consider various aspects of difficulties in writing.

Key words: writing process, difficulties in writing, factor analysis.

目 的

平山(1993)は、小学校5年生を対象として、「連想法を取り入れた作文指導法」を実施したところ、作文産出力の比較的低い児童において、作文産出量が増大するという効果を見出した。けれどもこの研究に関しては、書き手のどのような側面に、あるいはどういった作文産出プロセスにこの指導法が作用したのか、その結論は出されないまま、検討すべき課題として残されている。

さらに、平山・福沢(1995)では、この「連想法を取り入れた作文指導法」に関して過去の研究例および実践例が概観された。その結果、この指導法の最も顕著な効果は、作文産出量の増大であることが示された。そしてこの指導法に関して、今後どのような研究がなされていくべきかが、3つの点から論じられた。第1点は、この作文指導法(言語連想)のどの手続きが作文産出量の増大に最も関与するか、それを把握することである。第2点は、この指導法はどのような課題・書き手に有効か、それを明らかにすることである。第3点は、量的分析にどのような質的分析を付加するか、ということである。

以上のように「連想法を取り入れた作文指導法」に対しては、様々な検討課題が指摘されているが、実際このような課題に対してどのような取り組みが可能であるか、それを検討することが本研究の問題である。

そこで本研究では1つの方策として、児童の作文に対する困難感を把握することを提案したい。この作業を行うことによって、上記の検討課題のいくつかに応えることができると考えるからである。

児童が作文というものをどのように捉え、どのようなことを難しいと感じているのか、その構造をつかむことができれば、作文に対する困難感という視点から、書き手を類型化して捉えることができるだろう。そうすれば、その類型化が作文指導法の効果に関する分析に役立つと思われるのである。すなわち、ある指導法を実施した場合、ある類型に属する書き手には顕著な効果が見られ、一方別の類型に属する書き手には何ら影響が見られないことが判明した場合、その類型の差異から、その指導法が書き手のどのような側面に、あるいはどういった作文産出プロセスに作用したのか、推測することができるのである。

もちろんこのようなやり方は、「連想法を取り入れた作文指導法」の効果分析にのみ利用されるのではなく、その他様々な作文指導法の評価にも利用可能である。また、上述したように書き手の類型化が可能である場合、書き手の困難感に応じた指導法の選択や実施方法の工夫に寄与するであろう。

このように児童が作文に対して抱く困難感の構造を把握することは、作文指導にとって有益な示唆を持つと予測される。

本研究では、平山(1993)が「連想法を取り入れた作文指導法」の効果を検討するために研究の対象とした小学校5年生にまず注目し、探索的な検討を行ってみたい。

方法

【調査対象】 小学校5年生児童89名(男子44名, 女子45名)。**【調査時期】** 1994年7月～9月。**【質問紙】** 作文に対する困難感を問う27の項目からなる質問紙。**【質問項目の作成について】** 平山(1994)は、小学校4～6年生の児童238名に対して、「作文を書くときに困ることは何ですか?」と問い、自由記述の

回答を得た。そしてその回答を図1のようにいくつかのカテゴリーに分類した。①書くべき内容の欠如・選定の困難とは、「書くことが思いつかない。」

「書くことが決まらない。」などである。②題名に関する困難とは、「題名を決めるのが困る。」などである。③文の構成(組み立て)の困難とは、「文を組み立てること。」などである。④書字(漢字等)に関する困難とは、「習った漢字が書けない。」「文字をきれいに書かなきゃいけない。」などである。⑤段落・行の処理の困難とは、「段落分けがとても困る。」などである。⑥書き出し(書き始め)の困難とは、「書き出しの所を、どうやってはじめるか迷ってしまう。」などである。⑦言葉や文で表すことの困難とは、「自分ではわかるけど、文にどうやって書いたらいいかわからない。」などである。⑧句読点の付け方の困難とは、「『、』や『。』のうちかたがわからない。」などである。⑨書き終わりの困難とは、「最後の文章をどうゆうふうにかければいいか。」などである。⑩記憶(再生)の困難とは、「その時のことを思い出すこと。」などである。本研究では、これらのカテゴリーと各々に属する実際の回答を参考にしながら、質問項目は作成された。けれどもこれらは、児

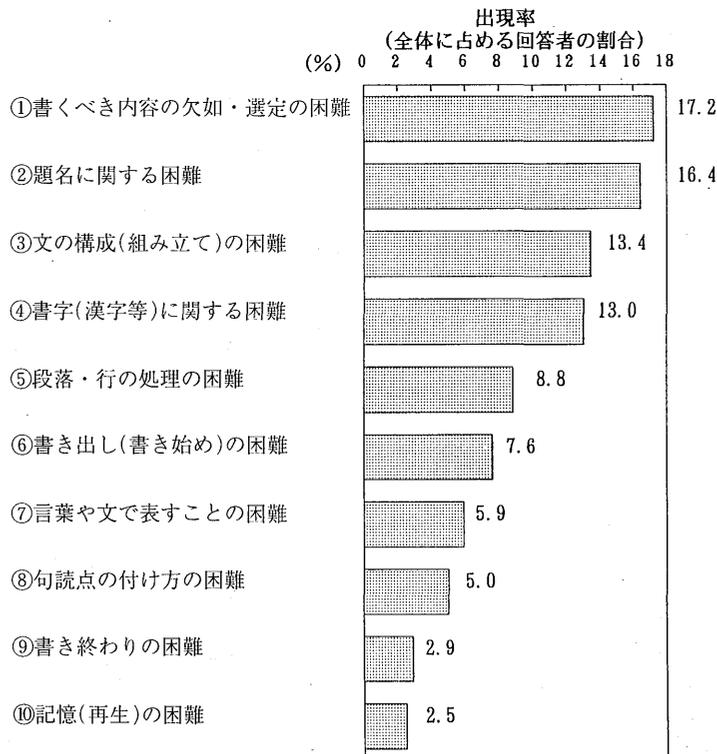


図1 児童の作文に対する困難感の分類とその出現率(平山, 1994)

童自らが気づく範囲での困難感であるため、彼らが実際に感じつつも気づいていない困難や、言語化が難しい困難もあることが予想されるので、そうした内容もできるだけ推測しつつ、作成されたものが27の質問項目であった。[手続]調査は集団で行われた。質問紙の配付・実施・回収の全ては各学級の担任が行った。まず、質問紙の配付後、学年・学級・出席番号・性別等が記入された。次に教示文が読まれた。教示文は、「これから作文について、いろいろな質問をします。これは学校の成績には関係ありません。また、結果を先生に見せることもありませんので、緊張しないで答えてください。しかし、真剣にやって下さい。」というものであった。その後、回答例が示された。「ぜんぜんあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらでもない」「ややあてはまる」「たいへんあてはまる」の表示の下に、1～5の数字がふられており、回答はその数字に○をつけるように指示された。項目全部に回答するように指示が与えられ、質問紙の回収は、全員の回答終了後に行われた。

結果と考察

27の質問項目のうち26項目は、「ぜんぜんあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらでもない」「ややあてはまる」「たいへんあてはまる」についてそれぞれ1～5点の得点化を行った。1項目(番号18, 表1参照)だけが逆転項目であったので、素点を逆転する処理を行った。

全27項目について、平均値および標準偏差を求めた。本研究では5段階評定を採用したため、各項目のとり得る最小の値は1, 最大の値は5である。各項目の平均値について見たところ、番号15を除いた26項目は、2～3点台であった。なお番号15(「原稿用紙の使い方がわからないことがある。」)の平均値(標準偏差)は、1.82(0.99)であった。

まず、27の質問項目全てについて因子分析を行った。初期解は主因子解で求められた。因子の解釈及び因子による説明率を考慮した結果、5因子が抽出された。得られた因子に対してバリマックス回転が実施された。因子負荷量が.3以上の項目を最終的に選定したところ、第1因子は9項目、第2因子は5項目、第3因子は4項目、第4因子は5項目、第5因子は3項目であった(表1参照)。番号15(「原稿用紙の使い方がわからないことがある。」)は、各因子に対して負荷量が低かった。これはこの項目の平均値が他の項目に比べて低い傾向にあったことなどが理由として考えられる。よってこの項目は本研究

が想定する5因子のいずれにも含まれないものと判断する。

第Ⅰ因子は、「書く内容を何にして良いか選ぶことが難しいことがある(番号16).」「次から次へと書くことを思い出すことができる(番号18).」「自分の考えを表すことばや文が思いつかないことがある(番号22).」「どのようなことについて書くか、思いつかないことがある(番号1).」「作文の題名を決められないことがある(番号3).」が作文の内容面に関連しており、「どのように書き始めれば良いか、わからないことがある(番号6).」「どこで文章を分けてよいか(段落)わからないことがある(番号9).」「どのような作文を書くのか、計画を立てることが難しいことがある(番号4).」「どのような順番で書いて良いか、わからないことがある(番号8).」は作文の構成面に関連している。したがって、この内容面及び構成面から、この因子は「構想上の困難」と命名された。

第Ⅱ因子は、「自分では何を書きたいかわかるけれど、文にすることが難しいことがある(番号14).」「うまく自分の気持ちを表すことができないことがある(番号10).」から表現の問題でまともと考えられる。つまり「作文を書けと言われても、目的や理由がわからないことがある(番号21).」は、内容の問題も含んでいるが、どのような表現形態が問われているのかという困難感と関連していると思われる。また「すぐに書いてしまうので、たくさん書くことができないことがある(番号20).」というのは、ある内容に関して十分な表現ができないことによるものと思われる。「作文の最後(おわり)をどのようにまとめて良いかわからないことがある(番号17).」は、作文内容の問題ではなく、作文を完結させる難しさの問題である。成人の作文においても文章の締めをどうするかは、表現のアイディアの問題である。よって、この因子は「表現上の困難」と命名された。

第Ⅲ因子は、「自分の書いた作文をどのように直して良いかわからないことがある(番号24).」「自分の書いた作文を読み直すのが、つらいことがある(番号23).」から、自分の作文に対する評価の問題が関係していると予想される。そのため「途中で何を書いて良いかわからなくなることがある(番号19).」であり、また自分の作文を評価しつつ、「どのくらいの量を書けば良いのか、わからないことがある(番号25).」ことになるのだろう。そこでこの因子は「評価上の困難」と命名された。

第Ⅳ因子は、「作文を書くのに時間がとてもかかってしまうことがある(番号13).」「作文を書くのがおそい(番号12).」から、時間上の問題が考えられる。

表1 因子分析結果

番号	項 目	I	II	III	IV	V	共通性
6	どのように書き始めれば良いか、わからないことがある。	.65	.17	.03	.13	.09	.47
16	書く内容を何にして良いか選ぶことが難しいことがある。	.63	.40	.32	.12	.14	.69
18	次から次へと書くことを思い出すことができる。(R)*	.59	.02	.07	.13	-.01	.37
9	どこで文章を分けてよいか(段落)わからないことがある。	.56	.25	.41	.04	.08	.55
4	どのような作文を書くのか、計画を立てることが難しいことがある。	.55	.44	.06	.20	.25	.61
8	どのような順番で書いて良いか、わからないことがある。	.53	.16	.43	.01	.10	.50
22	自分の考えを表すことばや文が思いつかないことがある。	.51	.38	.33	.27	.02	.58
1	どのようなことについて書くか、思いつかないことがある。	.47	.12	.15	.26	.16	.35
3	作文の題名を決められないことがある。	.42	.29	.13	.17	.19	.34
14	自分では何を書きたいかわかるけれど、文にすることが難しいことがある。	.36	.69	-.12	.20	.02	.66
10	うまく自分の気持ちを表すことができないことがある。	.27	.62	.34	.07	-.03	.58
21	作文を書けと言われても、目的や理由がわからないことがある。	.20	.57	.25	.17	-.03	.46
20	すぐに書いてしまうので、たくさん書くことができないことがある。	-.06	.44	.24	.02	.34	.37
17	作文の最後(おわり)をどのようにまとめて良いかわからないことがある。	.39	.40	.18	.23	.27	.47
24	自分の書いた作文をどのように直して良いかわからないことがある。	.26	.15	.58	-.08	.26	.50
19	途中で何を書いて良いかわからなくなることがある。	.44	.35	.53	.15	.01	.61
25	どのくらいの量を書けば良いのか、わからないことがある。	.10	.17	.50	.20	.07	.34
23	自分の書いた作文を読み直すのが、つらいことがある。	.07	.04	.49	.34	.22	.41
13	作文を書くのに時間がとてもかかってしまうことがある。	.12	.35	.02	.71	-.01	.65
12	作文を書くのがおそい。	.23	.10	.12	.69	-.07	.56
11	むかしにあったことなどを、思い出せないことがある。	.17	-.01	.42	.44	.27	.48
27	自分の書いた作文を読み直すと、書きたかったことが書けていないことがある。	.22	.27	.29	.36	.23	.39
7	いろいろと迷って、何を書くか決めることができないことがある。	.31	.14	.34	.34	.07	.36
2	文字をきれいに書くことができないことがある。	.13	-.06	.09	.21	.71	.57
5	習った漢字が書けないことがある。	.26	.14	.03	-.15	.50	.36
26	「、」や「。」などの使い方が、わからないことがある。	-.03	.05	.23	-.00	.35	.18
15	原稿用紙の使い方がわからないことがある。	.16	.28	.11	.22	.18	.19
二乗和		3.74	2.76	2.46	2.12	1.52	

* Rは逆転項目を示している。

「いろいろと迷って、何を書くか決めることができないことがある(番号7).」のは、作文を書き上げる時間的制限のため、焦燥感などがあることを示していると思われる。「むかしにあったことなどを、思い出せないことがある(番号11).」も限られた作文時間内に記憶の再生が要求されていることを予想させる。また「自分の書いた作文を読み直すと、書きたかったことが書けていないことがある(番号27).」は、作文時間内に何とか書き上げるために、作文そのものが不十分になったことを示しているようである。そこで、この因子は「時間上の困難」と命名された。

第V因子は、「文字をきれいに書くことができな

いことがある(番号2).」「習った漢字が書けないことがある(番号5).」「『、』や『。』などの使い方が、わからないことがある(番号26).」であり、文章産出に直接関連するものというよりは、作文において基本的に求められる技術ということから、「作文の基本技術上の困難」と命名された。なお「原稿用紙の使い方がわからないことがある(番号15)」は、この因子に包含されるのではないかと考えられるが、「原稿用紙の使い方」という質問上の表現が、他の3項目に比べて抽象的であったことがこの因子に合わなかった原因と考えられる。

このような検討の結果、構想上の困難(第I因子)、表現上の困難(第II因子)、評価上の困難(第III因子)、

時間上の困難(第Ⅳ因子)、作文の基本技術上の困難(第Ⅴ因子)の5つの因子が見出された。この児童の作文に対する困難感の構造から読み取れることは次のようなことである。まず第Ⅰ因子「構想上の困難」および第Ⅱ因子「表現上の困難」は文章を産出するというところに深く関連した困難であるということであろう。一方、第Ⅳ因子「時間上の困難」および第Ⅴ因子「作文の基本技術上の困難」は、学校の教室において行われる授業の中での作文指導に関連が深い困難であると推察される。そしてその中間的存在として第Ⅲ因子「評価上の困難」がある。これらのことから、一言で作文に対する困難感といっても、「文章産出過程」性の困難と「作文課題」性の困難という2つの軸を想定することが可能である。

本研究の目的は、児童が作文に対して抱く困難感の構造を把握することにあった。因子分析による探索的な検討により5つの因子が見出され、さらにそれらが「文章産出過程」性の困難と「作文課題」性の困難という軸で捉えうるという示唆的な結果を得ることができた。しかし、この研究の本来の意図は、作文指導法の効果の検討に、困難感の構造分析を役立てることにある。それにはまだ分析の規模・対象は十分であるとはいえない。けれども今後このような視点から研究を展開する足掛かりは構築することができた。

要 約

本研究の目的は、作文を書くときの児童の困難感

の構造を把握することにあった。これは作文指導法の効果を検討する際に、それを役立てるという意図があったためである。

そこで作文に対する困難感を問う27の項目から成る質問紙を、小学校5年生89名に対して実施した。回答は5段階評定で行われ、その得点に対して因子分析が行われた。その結果、「構想上の困難(第Ⅰ因子)」「表現上の困難(第Ⅱ因子)」「評価上の困難(第Ⅲ因子)」「時間上の困難(第Ⅳ因子)」「作文の基本技術上の困難(第Ⅴ因子)」という5つの因子が見出された。さらに、これらの因子について考察を加えた結果、「構想上の困難(第Ⅰ因子)」と「表現上の困難(第Ⅱ因子)」から、「文章産出過程」性の困難、そして「時間上の困難(第Ⅳ因子)」と「作文の基本技術上の困難(第Ⅴ因子)」から、「作文課題」性の困難という2つの上位軸を想定することができると考えられた。

引用文献

- 平山祐一郎 1993 連想法を取り入れた作文指導法の効果に関する研究—作文量を中心として— 教育心理学研究, 41, 399-406.
- 平山祐一郎 1994 小学校高学年児童の作文に対する意識調査 日本心理学会第58回大会発表論文集, 875.
- 平山祐一郎・福沢周亮 1995 連想法を取り入れた作文指導法に関する研究の概観と展望 筑波大学心理学研究, 17, 37-42.